

# 鹿大ジャーナル

## 鹿大広報

鹿児島大学が発信する最先端情報マガジン

<https://www.kagoshima-u.ac.jp/>

特集

### 地域が担う地方創生と人材育成

鹿児島市と鹿児島大学の連携協定締結から10年を迎えて

08

潜入ルポ ～学びの部屋～

#### 地域キャリアデザイン

産学官連携推進センターCOC+推進部門  
牧野 暁世 特任助教

10

先輩からのメッセージ

OB: 一般社団法人鹿児島水圏生物博物館  
代表理事 岩坪 洗樹 さん

OG: 最高裁判所司法研修所 第71期 司法修習生  
久徳 衣子 さん

12

研究室からSCHOLAR INTERVIEW

#### 植物の多様な個性を探り、 人と環境にやさしい世界へ

農学部農業生産科学科 志水 勝好 教授

#### 離島の漁業を支える 鹿大発の高鮮度冷凍技術

水産学部水産学科 木村 郁夫 教授

16

鹿大トピックス

#### 総合動物実験施設が「AAALAC」 (国際実験動物ケア評価認証協会)の認証を取得

ほか

19

進め! 鹿大生

#### 「乾坤一擲の跳躍」で 国際舞台へ駆け上がる!

教育学部学校教育教員養成課程2年生 田坂 裕輝 さん

#### さつつんが行く!

就職支援センター



特集

# 地域が担う 地方創生と人材育成

～鹿児島市と鹿児島大学の連携協定締結から10年を迎えて～

鹿児島大学 前田 芳實 学長  
ま え だ よ し ざ ね

鹿児島市 森 博幸 市長  
も り ひ ろ ゆ き

司会 本日は、鹿児島大学の教育・研究及び社会貢献活動、地域への取り組みと成果についてお話しいただきたくため、本学の前田芳實学長と鹿児島市の森博幸市長にご出席いただいております。大学と地域の関係や地域が大学に期待することなど、忌憚のないお話を伺えればと考えています。私は、今回の進行を務めます広報センター長の中島でございます。

## 鹿児島大学の地方創生

司会 それではまず、鹿児島大学の地方創生に向けた取り組みについてご説明いただけますでしょうか。

前田 鹿児島大学は、自ら困難な課題に果敢に挑戦する「進取の精神」を有する人材育成並びに「進取の気風にあふれる総合大学」に相応しい大学改革を実施することを計画して

います。現在、第3期中期目標・中期計画の期間であります。この期間においては、南九州及び南西諸島の「地域活性化の中核的拠点」としての機能を強化する方針を打ち出しております。地域特性を生かした教育及び国際化に対応した教育を推進し、地域ニーズに応じた社会人教育や地域との連携を強化しています。

鹿児島大学では、いま「南北600kmこれが私たちのキャンパス」というスローガンを掲げており、学生たちにもそのような意識で学ぶ心意気を育てていきたいと思っております。これは、鹿児島県土の600kmを鹿児島大学のキャンパスとして、教育や研究、社会貢献活動に取り組みむということです。このフィールドには、火山や世界自然遺産の屋久島、そして奄美群島に代表される島々があり、生物の多様性など勉強する題材が豊かにあります。こういう風土

を活用し、教育・研究に活かせるのも鹿児島大学の強みです。

**司会** 地域課題に取り組み人材育成の枠組みとして平成29年4月から、「地域人材育成プラットフォーム」が構築されました。これについてはいかがでしょうか。

**前田** 鹿児島大学は、鹿児島・南九州の「地域活性化の知の拠点」としての役割を担っており、地域人材の育成を行っています。地域マインドを備え、地域の課題を発見し、その解決策を論理的に考察し、さらにその解決のための取り組みに能動的に関与できる学士、これが鹿児島大学が定義する地域人材です。

他の大学では、地域に関する学部を設立したところもありますが、鹿児島大学では、地域人材を輩出するため、9学部を有する総合大学の強みを生かし、学部横断的な教育プログラムの枠組みとして「地域人材育成プラットフォーム」という新しい教育体系を学内に用意しました。このプラットフォームには、地域就業に主眼を置く「かごしまキャリア教育プログラム」と、地域の歴史や伝統、文化、自然を学際的に学ぶ「かごしま地域リサーチ・プログラム」の2つの教育プログラムが用

意されています。本プラットフォームにおける教育プログラムは、学部を横断した多様な学びに加え、インターシッピングやフィールドワークなどの実地体験を行うことによつて、社会における実践力を身につけることを目的としています。最近その重要性がよく言われているアクティブラーニングの中心について、このようなインターシッピングやフィールドワークを通して充実させていきたいと思っています。

**司会** 前田学長は、平成28年度「鹿児島大学進取の精神チャレンジプログラム」に地方創生活動部門を設けられました。

**前田** 「鹿児島大学進取の精神チャレンジプログラム」は、平成23年度から開始しています。進取の精神というのは鹿児島大学のキャッチフレーズです。学生自らが企画・運営・実施するさまざまなプログラムを通じて、困難な課題に果敢に挑戦するという趣旨があります。採択されると大学が活動経費を支援します。平成28年4月からは、このプログラムの中に新たに地方創生活動部門を設けました。これは、鹿児島県内自治体の地域課題、例えば、魅力ある観光資源の発掘とPR戦略の提言、商店

街の賑わい創出への支援など、地域が抱える問題に果敢に取り組み活動に資金を補助しようという試みです。

**司会** 人口の減少が進む中、競争力をつけるためには、地域に根ざした大学として、いかに特色を出していくかが重要となります。総合大学の特色を生かした関係部署間連携へ向けた取り組みについてお伺いしたいと思います。

**前田** 総合大学の特色を生かした「島嶼」、「環境」、「食と健康」、「水」、「エネルギー」の5つのプロジェクトは、部局の枠を超えた全学横断的な研究活動として、学際的共同研究のもとで研究を推進しています。地域ニーズに応えるには、本学のすべてで人材を育成することが必要になってくるものと考えています。本学は、9学部9大学院研究科による「オール鹿大」で地方創生に取り組み、総合大学としての強みと地域特有の課題や特色を生かした学術研究を推進していきたいと思っています。

**司会** そのほか、大学が地域に対して貢献する活動としてはどのようなことがありますでしょうか？

**前田** 今、企業ではグローバル化が

進んでおり、英語力などバランスのとれた人材が必要とされています。本学では、グローバルな視野と行動力、課題発見・解決力、発信力、コミュニケーション力や粘り抜く力、困難を乗り越える力など、社会人としての基礎力がしっかりと身につくような教育を行っています。その取り組みとして、平成29年度に総合教育機構を設置しました。それから、入試改革として、国際バカロレア入試や外部英語試験を導入しました。

**司会** 先ほどお話いただいた地域貢献のためのさまざまなプログラムは、推進に加えて、グローバルな人材の育成を通じて地域貢献を図っているということですね。そのほか、大学が地域に対して行っている活動についてお尋ねしたいと思います。

**前田** 最近、リカレント教育という言葉がありますけれども、社会人を



司会：中島 宏  
(なかじま・ひろし)  
鹿児島大学 学長補佐 (広報担当)

対象とした教育を行うということも、地域に生きる大学としては大変重要なことだと思えます。社会貢献としては、地域住民向けの勉強会や市民公開講座などを開催しています。焼酎講座や地域防災といった鹿児島特有のシンポジウムや市民講座も開催しています。

## 鹿児島市の地方創生

司会 次に森市長にお聞きします。人口減少の現状と課題についてご説明いただけないでしょうか。

森 ご存じの通り、わが国においては平成27年国勢調査の結果、総人口が初めて減少し、経済規模の縮小や地方都市の衰退が危惧されるなど、時代の大きな変化の中で、それぞれの地域で将来に対する不透明感、不安感が払拭できない状況となっています。

人口の減少は、地域経済の縮小、少子化の一層の深刻化、医療・介護需要の増大、地域コミュニティ機能の低下など、さまざまな分野において地域の将来に大きな影響を及ぼす喫緊の課題です。鹿児島市の人口も60万人を下回り、平成27年の国勢調査において初めて減少に転じました(平成27年10月1日現在、59万9814

人)。本市においては、合計特殊出生率の改善や景気の緩やかな回復基調など、明るい材料もありますけれども、想定以上に人口減少が進んでいるものと認識しています。

司会 そういう状況下で、鹿児島市ではどのような取り組みがなされているのでしょうか？

森 現在、「東京一極集中の是正」などを基本的な視点として、わが国が直面する人口減少問題を克服し、地域活力の維持向上を図るため、国・地方が一体となって地方創生に取り組んでいます。本市でも、将来にわたって活力を維持し、地方創生に積極的に対応していくための指針として、平成27年12月に「鹿児島市まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定しました。

司会 森市長がお考えになっている今後のまちづくりの方向性について



鹿児島市地方創生総合戦略

お伺いしたいと思います。

森 本市では、平成30年の明治維新150周年事業と大河ドラマ「西郷どん」の放送、平成32年の「かごしま国体」など、歴史に刻まれる大型イベントの開催が予定されており、また、中心市街地などで民間主導による複数の大規模な拠点開発が進むなど、「第二の維新の波」が訪れようとしています。まさに今後の市政の行方が、将来の鹿児島のみちの装い、品格、機能などを決定づけていく極めて重要な時期になると考えています。この波を最大限に生かしながら、市民にとっての「豊かさ」を増幅さ



「西郷どん」大河ドラマ館 (イメージ)

せるとともに、本市の持続的な発展の基礎を築き、継承していくことが重要であると考えています。総合戦略で掲げた「郷土への誇りを胸に市民が生き生きと暮らし、国内外から訪れる多くの人々が行き交う、豊かさを実感できるまちづくり」を目指して、雇用創出や少子化対策、交流人口の拡大など、各種施策を着実に、積極的に進めていきたいと思えます。

## 鹿児島市と鹿児島大学の連携の強化

司会 鹿児島市と市内の大学との関係についてはいかがでしょうか？

森 本市では、市と大学が持つ資源や機能等の活用を図りながら、相互に協力し、地域社会の発展に寄与することを目的に、平成28年度までに市内に6つあるすべての大学(鹿児島大学、鹿児島女子短期大学、鹿児島国際大学、鹿児島純心女子短期大学、鹿児島県立短期大学、志学館大学)との連携協定を締結したところです。

今年度は、市内の6大学と本市の連携窓口が一堂に会し、連携事業に関する協議等を行う「鹿児島市大学連携ネットワーク会議」を9月5日に初めて開催しました。また、年度内には、6大学の学生が一堂に集う



学生との協働による広報紙「市民のひろば」制作

「鹿児島市大学連携学生シンポジウム」の開催を予定しており、各大学の魅力や連携事業を広くPRしていきたいと考えています。

司会 鹿児島市と鹿児島大学との連携についてはどのような状況でしょうか。

森 鹿児島大学と本市は、市内の大学の中では最も早く、平成19年に「本市のまちづくりに関すること」と「地域経済の活性化に関すること」について、包括的な連携協定を締結し、今年の11月でちょうど10年の節目を迎えます。連携内容も年々充実してきており、現

在では80を超える取り組みを実施しています。

一部を紹介しますと、例えば、本市の広報紙「市民のひろば」の情報面において学生と協働で編集作業を行い、紙面に若者の視点を取り入れることで「面白い」、「読みやすい」などの好評をいただきました。それから、鴨池地域まちづくりワークショップの一環として、大学内の探訪や、学生と地域の小学校との学びの場を設けるなど、地域住民との連携にもご協力をいただいています。その他、本市が目指す「世界基準のまちづくり」に関して、鹿児島大学の専門家や学生に協力をいただきながら、旧集成館などの世界文化遺産登録や、桜島・錦江湾の世界ジオパーク認定に向けた取り組みも進められてきたところです。

司会 今後、鹿児島大学との連携を強化したい分野としては、どのようなものがありますか？

森 今後とも、専門的な見地からの助言に加え、学生の若者らしい斬新な発想力を、本市のまちづくりにさらに生かしていきたいと考えています。国内の経済規模が人口減少等により縮小していく中で、本市では、九州の南の拠点として、国内はもと

より、地理的に近接するアジアの都市と連携・協力して、地域資源を掘り起こすとともに、新たな魅力を創出していく必要があります。それらを効果的に情報発信していくためには、アジアの国々から多くの留学生を受け入れている鹿児島大学との連携が不可欠であると考えています。国際交流の観点からも、互いに連携・協力しながら、アジアとの人・もの・情報の多面的な交流を成長エンジンとして、鹿児島島の新たな活力の創出につなげていきたいと考えています。

司会 森市長が求める人材についてはですが、具体的に鹿児島大学にはどのような人材育成を望まれますか？

森 本市においては、10代後半から20代前半にかけての転出超過、特に就職や進学を契機として、18歳以上の方々の市外流出が顕著です。若者の地元定着は、地方創生の実現に向けて必要不可欠で、若者の市外流出の原因を分析し、実効性のある対策を講じていく必要があると考えています。そのためには、若者が地元に残り、自分のふるさとを活性化し、魅力を高めていこうという思いを湧き立たせるようなまちづくりが大切であると考えています。自分が生まれ育ったまち、学んだまちが魅力的



鹿児島大学での市長とふれあいトーク

であれば、住みつけたい、いつか戻ってきたい、そう思ってくれると思います。学生がまちづくりに参画できる機会をさらに充実させていくこと、そして、産業界と行政、次代の人材育成を担う大学が互いに連携して知恵を絞りながら、連携を深化させていくことで、若者の地元定着と一緒に取り組んでいただきたいと思えます。

### 鹿児島大学に対する期待

司会 森市長から、鹿児島大学に対する期待をお聞かせください。

森 先ほど前田学長からお話があ

りましたけれども、鹿児島大学では  
文部科学省の認定を受け、現在「地  
（知）の拠点整備事業」、いわゆる  
「COC事業」に取り組みられています。  
この取り組みは、「火山と島嶼を  
有する鹿児島島の地域再生プログラム」  
として、防災や観光、エネルギー、  
農林水産業をテーマに、自治体とと  
もに課題を解決していくものとされ  
ており、鹿児島島の地域特性に的確に  
対応したものであると認識していま  
す。鹿児島大学の「地（知）の拠点」  
としての役割や取り組み、研究の成  
果について、もっと市民、県民の理  
解が広がり、ひいては、高校生の地  
元進学率や、大学生の地元就職率の  
向上にも寄与するよう、大学からの  
積極的な情報発信に努めていただ  
くことを期待しています。

前田 本学では平成26年10月に設置  
しました「かごしまCOCセンター」  
を中心に、防災や離島医療などの解  
決策を探っており、研究成果報告会  
も開催しています。今後は、さらに  
積極的に情報発信に努めていきたく  
と考えています。

森 特に鹿児島大学には、県内8つ  
の大学の中心的な役割を果たしてい  
ただけのものと期待しています。「地  
（知）の拠点大学による地方創生推

進事業」、いわゆる  
「COC+事業」に  
おいて目標とされ  
ている「大学生の  
県内就職率の向上」  
は、本市の地方創生  
総合戦略や第五次  
総合計画において  
も、目標指標とし  
て掲げており、そ  
ういった意味にお  
いても鹿児島大学  
と本市は、目指す  
方向性が一致して  
います。地方創生を実現する上でも、  
「COC+」の拠点大学として、県  
内唯一の国立の総合大学として、鹿  
児島大学の役割は非常に大きいもの  
と考えています。鹿児島大学には、  
学術研究分野はもちろんのこと、地  
域貢献の分野においても、県内の大  
学を、そして九州、国内の大学をリ  
ードする大学として、ますます飛躍さ  
れ、鹿児島を牽引していただきたい  
と思います。

司会 いま森市長からCOC事業、  
COC+事業、そして大学への期待  
について触れていただきました。そ  
の点についてお話しください。

前田 大変大きな期待ですね。鹿児



前田芳實（まえだ よしざね）鹿児島大学長  
昭和44年 3月 鹿児島大学大学院農学研究科修了  
（昭和52年3月 農学博士取得（九州大学）  
鹿児島大学助手農学部  
平成 6年 7月 鹿児島大学教授農学部（～平成21年3月）  
平成21年 4月 国立大学法人鹿児島大学理事（～平成25年3月）  
平成25年 4月 国立大学法人鹿児島大学長（～現在）

島大学はCOC+大学として、教  
育プログラムの改革及びインターン  
シップ・就職支援策の拡充整備のほ  
か、学卒者の地元就職の促進に向け  
て、県内の大学や鹿児島県、企業団  
体等、「オールかごしま」による地方  
創生を推進する体制を構築していま  
す。ちょうど鹿児島市の中心に位置  
するキャンパスで、防災や島嶼、医  
療など地域の課題に目を向け、地域  
社会の発展に貢献できる人材を育て  
ていきたいと考えていますので、今  
後ともご指導、ご助言をお願いした  
いと思います。

### 鹿児島大学の学生への期待

司会 それでは、最後に森市長から  
鹿児島大学の学生にメッセージをお

願います。

森 人口減少・少子高齢化問題を打  
開していくためには、若い感性、挑  
戦するエネルギー、柔軟な発想が必  
要です。我々の年齢になると固定観  
念で対応しがちになり、それを打ち  
破るのはなかなか難しいと感じます  
が、学生の皆さんには、ぜひ若者ら  
起こしてほしいと思います。

また、鹿児島大学は、さまざまな  
分野の専門家が集い、情報が集積す  
る頭脳集団であり、われわれ鹿児島  
市民にとっての財産だと思っています。  
さらに能力に磨きをかけていた  
だき、もっと県外・世界に情報を発  
信していったほしいと思います。

それから、本市では、市民や

NPO法人などと連携した協働のまちづくりを進めており、さまざまなワーキンググループ等を通じて、学生に参加していただき、若者の視点での意見をいただいています。こうした取り組みをはじめ、地域ボランティア活動などについても、多くの学生に参加・協力していただければ、本市としても大変ありがたいですし、学生にとっても地域とのつながりを



前田 私は、鹿児島大学で学びましたので、在学生は私の後輩ということになります。私が入学した当時は、日本の高度経済成長が始まりかけた頃でしたので、非常に活気がありました。社会に出て活躍しよう

体感でき、社会活動を経験できる貴重な機会になるのではないかと思います。鹿児島は観光資源をはじめさまざまな素材がそろった、成長可能性の高いまちですので、卒業後は、ぜひそうしたポテンシャルを生かした起業・創業へのチャレンジなどを通して、鹿児島をもっと元気にし、支えていただけるような「人財」として大きく羽ばたいていただきたいと思っています。

という向上心の強い学生が多かったように思います。私は、ソ連（現在のロシア）のイーリンという歴史学者の書いた本の中にあつた「農業はすべての文化の上流にある」という言葉に感銘を受け、農学部に興味を持ち、進路を決めました。それから、高校時代に繰り返し詠んだ広瀬淡窓という漢学者の漢詩の中に「道うことを休めよ 他郷苦辛多し」という言葉があります。これは、故郷を離れて学ぶことに不満を持たず一生懸命勉強しなさい、という意味です。最近、私は、この「他郷」という言葉は、新しい環境、新しい生活の場、新たな仕事、新たな人間関係、新たな学問領域、未開の地など、これから始まる世界というような意味だと、解釈するようになってきました。未

知のことに大いにチャレンジしなさい、ということだと思いついています。これは本学のうたっている進取の精神を培うということにつながると思います。学生には「道うことを休めよ 他郷苦辛多し」という思いを持っていただきたいと思っています。それから、鹿児島大学では海外研修や進取の精神チャレンジプログラムなど、学生の支援を行っています。若い世代ですので、そういうものを活用してさまざまなことにチャレンジして人間性を磨いてほしいと思っています。

司会 本日は、お忙しいところ、貴重なお話をありがとうございました。



森 博幸（もり ひろゆき）鹿児島市長  
平成16年12月 鹿児島市長（1期目）～現在（4期目）  
平成17年 1月 鹿児島県市長会会長  
平成23年 6月 全国市長会相談役  
平成26年 2月 税制調査会特別委員  
平成27年 5月 九州市長会会長



地域キャリアデザインで養成する能力

文系・理系の学生が共に課題に取り組む授業では、コミュニケーション力、リーダーシップ、協調性など幅広い能力が求められる



# 「地域キャリアデザイン」(共通教育科目)

●産学官連携推進センターCOC+推進部門 特任助教

本学は、地域に立脚した総合大学として2014年度、文部科学省の「地(知)の拠点(COC)整備事業」に採択された。さらに2015年度には地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)の採択を受け、地域人材の育成、人材の地元定着支援、新規雇用の創出及び既存雇用拡大への取り組みなどを推進している。学部横断的な教育プログラムと併走として今年4月には学内に「地域人材育成プラットフォーム」という教育体系を構築。入学直後から3年次まで、地域志向のキャリア形成について多面的に学び、実践力を身につけることを目指している。キャリア教育という新しい学問ではどのようなことを学ぶのか?1年生を対象とした「地域キャリアデザイン」の1コマを覗いてみた。

## 授業の中で踏み出す キャリアへの第一歩

この授業の目標は、自らの資質や可能性を客観的に検討すると同時に、鹿児島県の地域特性や産業構造などを把握し卒業後のキャリアを展望するこ

とで、在学中の学びのプランを構築すること。産学官連携推進センターの牧野先生らによる講義のほか、自治体職員、企業人などを招いての講義も数回行われる。グループ学習によるアクティブラーニングを取り入れているのも特徴だ。

参観した日は、学生によるプレゼンテーションが行われていた。グループに分かれ、鹿児島県内の上場企業各社の中から1社を選び、企業情報や労働環境など、事前に調べて得た情報を発表するというものだ。パワーポイントで作成した映像を活用する班、声に抑揚をつけ、聴衆を見回して語りかけるような学生。緊張の中にも各グループの努力と個性が表れている。人前で話すというスキルは、圧倒的に経験がものを言う。社会人になった時、学生時代のこの一歩の大きさを実感することだろう。印象的だったのは、8グループのうち過半数の班が、学生に馴染みの深い学習塾を経営する同一企業を扱っていたこと。「世の中は知らないことばかりです。知らない情報を得るといって楽しみも覚えてほしい」。知的探究心によって視野を広げてほしいと牧野先生は言う。

## 牧野 暁世 先生

### 人生の基盤に直結する学問

学生の発表が終了すると、共同担当教員の井上佳朗先生(産学官連携推進センターCOC+推進部門部長/特任教授)による講評が行われた。「企業情報を得るのは、仕事を中心とした人生のイメージを描くためにも必要なこと。いろいろな情報を収集し、比較検討することも大切です」。情報収集やプレゼン、ヒアリングなど、この授業を通じて行う活動がそのまま人生に直結しているということを井上先生は伝える。「今日皆さんが発表した情報が、企業を選択するのに本当に十分な内容でしょうか?」。人生の先輩としての親心がメッセージに込められる。

### 見えない情報を 集める努力を

情報源として学生らが挙げたのは各社の自社ホームページ、『会社四季報(東洋経済新報社)』が主流。「福利厚

生、退職金制度、財形貯蓄、などという言葉が出てきましたが、その本当の意味、働く側にとつてどんな意味があるのか、ということまで理解しないと情報を役立てることにつながりません」。得た情報をきちんと咀嚼してほしい、と牧野先生。さらに、入社3年の離職率、有給休暇の取得率などについて公表していない企業については、さらに入念なりサーチが必要であることも示された。「出ていない情報に大事なことが隠れているかもしれない」。情報の精度を上げてください。シラバスでは授業の中で企業人を招き、学生がヒアリングする時間も設定されている。学生のみならず企業人にとつても発見や気づきの機会となるものである。学生の皆さんには、培われた情報収集能力やコミュニケーション能力、そして地域貢献への意欲をもつて大きく社会へ羽ばたいてほしい。



profile

**牧野 暁世** (まきの・あきよ) 特任助教  
鹿児島大学 社会貢献機構 産学官連携推進センター COC+推進部門  
【最終学歴】名古屋大学大学院 環境学研究科 博士課程後期課程満期退学  
【学部卒】金城学院大学 家政学部、名古屋芸術大学 デザイン学部  
【学位】修士(心理学) 2010年3月  
【所属学会】日本色彩学会、日本心理学会  
【専門分野】地域ブランディング、色彩学、デザイン学  
【研究テーマ】農産物を通じた持続可能な地域づくり



一般社団法人鹿児島水圏生物博物館

代表理事 岩坪 洸樹(いわつぼ ひろき)

鹿児島市出身。2011年3月鹿児島大学水産学部水産学科卒業。2013年3月修士課程修了。鹿児島県漁業協同組合連合会勤務を経て2015年4月、枕崎市において鹿児島水圏生物博物館設立。2016年5月より社団法人としての運営開始。

OB OG Interview

01



美しい魚を、美しい姿で、多くの人に見てもらいたい。

好きな事を仕事にできた幸運は、人との縁から。

枕

崎市のお魚センターの  
一画に鹿児島水圏生  
物博物館展示室を開設し、透  
明骨格標本を主とした展示  
をしています。透明骨格標本  
は、薬品を使って魚の肉を透  
明化し骨に彩色することで、  
魚の骨格を詳細に観察するこ  
とができます。現在、およそ  
800種、千点以上の標本を  
所蔵しています。そのほか、地  
元で水揚げされる魚のポス  
ターを制作し、子ども向けの  
体験講座を主催するなど、海  
の生き物と環境に関する啓発  
活動も行っています。

学部生の頃は主にスズメダイの分類、研究室では魚類全般の収集・分類に携わりました。卒業後、透明骨格標本作りを本格的に始めました。一般的な標本作成に比べて工程が複雑で時間もかかりますが、標本の美しさは格別です。最初は仕事の合間に趣味として作っていたのですが、タツノオトシゴハウス(南九州市・加藤紳代表)で展示させてもらったことがきっかけとなり、いろいろな方と縁につながり、

枕崎での博物館設立が実現しました。

好きなことを仕事にできて  
いる自分は運が良かったのだ  
と思います。好きなことを生か  
せる仕事の方が愛着を持つこ  
とができるし、やる気が出る  
と思います。人との出会いに恵  
まれ、人からもらったチャンス  
を生かすことができたから、  
ここまで来られたのだと思っ  
ます。将来的には、より多くの  
収蔵品を展示できる施設を建  
て、もっと多くの人に海の生き  
物に親しんでほしいという目  
標を持っています。大学時代に  
好きなことを見つけ、焦らず  
に進路を見極めてほしいと思  
います。





最高裁判所司法研修所 第71期 司法修習生

久徳 衣子(きゅうとく きぬこ)

鹿児島市出身。2000年3月鹿児島大学工学部応用化学工学科卒業。2010年4月鹿児島大学大学院司法政策研究科入学。2014年同科修了。

## OB OG Interview 02

### 人生の節目で出会った人々の生き様に触発され 二児のママが挑んだ司法試験受験への道。

# 学

部卒業後、鹿児島市の学習塾で数学講師を務めていました。結婚後、夫の転勤とともに奄美大島へ移り住みました。助け合って暮らす心豊かな島の人たちや、望む生き方を実現するため島へイターンした人たちなど、さまざまな人との出会いを通じ、多様な価値観に触れる奄美の暮らしでした。私自身、結婚、出産という人生の節目にあたり、生き方を自問自答していた時期。女性であることを理由に自由な生き方を制限される必要はないのではないかと、という思いが芽生えていたことから、一生の仕事につながる資格の取得を決心しました。それが司法試験に挑戦した動機です。

学部生時代はバイクが趣味で、あちこち走り回っていました。本格的に勉強したのは法科大学院へ進学してからです。司法試験受験と子育ての両立はハードでしたが、家族のサポートの中、時間の有効活用や気持ちの切り替えなど多くを学びました。院では先生との距離も近く、質問や相

談に気軽に答えていただくことができ、キャンパスの銀杏並木や池などの自然も心を癒してくれました。

インターネットでググれば何でも答えが出る時代。ですが、自分の頭で考えることをやめないでほしいと思います。入った学部は自分の意思で選んだ道でしょうか？ 世間や時代の空気を読み、そこからのみ出ることを恐れていないでしょうか？ 思考して出た結論の積み重ねが、人生の糧になっていくのだと私は思います。くだらないことでもいいのです。じっくり考える時間は、大学生に与えられた特権ですから。



## 研究室から



SCHOLAR  
INTERVIEW

## 植物の多様な個性を探り、人と環境にやさしい世界へ

～希少野菜シーアスパラガスの水耕栽培技術に成功した農学者の志～

塩気を含む野菜にお目にかかったことがありますか？コリっとした食感と塩気が特徴のシーアスパラガスは、フランス料理やイタリア料理などの食材として使われる希少野菜。栽培が難しいため高価な輸入品が流通しているが、本学の志水勝好教授がこの希少作物の水耕栽培技術を確立。この夏、市場への初出荷を実現した。シーアスパラガスの栽培に取り組む情熱の源について、この植物と30年あまり付き合ってきた農学者に伺った。

### なぜシーアスパラガス？

シーアスパラガスは、汽水と海水の混ざる土地や塩田に自生するアカザ科の植物。和名はアッケシソウ。紅葉して赤くなる様からサンゴソウとも呼ばれる。土壌の塩分濃度が下がり、他の雑草が繁茂できなくなるというデリケートな植物だ。絶滅危惧種に指定されており、北海道網走の自生群落は天然記念物として保護されている。

志水先生がシーアスパラガスの研究を始めたのは学生時代。「なぜ塩に強いのだろう？」という純粋な探究心から卒論のテーマに取り上げた。研究を進めるにつれ、塩に強い植物の能力を利用して、砂漠緑化への活用を探り始めた。シーアスパラガスや佐賀県の東大川に自生するシチメンソウなど、塩に強い「塩生植物」は体内に塩分を集積することから、土壌の塩分を抜く働きがある。シーアスパラガスは、海水の塩分濃度

3%をはるかに上回る20%という塩分濃度への耐性があることも確認された。「砂漠化が進む大きな原因の一つは塩害。干ばつなどの自然条件、あるいは環境を無視した営農など人為的な要因によって地球の砂漠化は進んでいます」。シーアスパラガスのような耐塩性をもつ植物のほか、アルカリグラスなど耐アルカリ性をもつ植物が砂漠の緑化に有用ということも研究を通じて明らかになった。志水先生がシーアスパラガスへ向ける情熱の先には、植物の特性を生かした地球環境の修復という大きな目的がある。

### 多様だからこそその可能性

志水研究室の圃場には、シーアスパラガスのほかケナフ、トウゴマ（ヒマ）、ナンヨウアブラギリなど、さまざまな植物が植えられている。紙や建築ボードの原料として活用されているケナフは水質を浄化する性質を持ち、その葉は食料や飼料となる。油



成長したシーアスバラガスの芽は摘み取り、食用として出荷。現在、鹿児島市の天文館まちの駅「ゆめりあ」にて販売中



さっと湯がいてペペロンチーノに、鮮やかな彩りと歯ごたえが◎



## Scholar Interview

# 志水 勝好 教授

農水産獣医学域農学系  
農学部 農業生産科学科

**Profile** 志水 勝好(しみず・かつよし)  
筑波大学大学院農学研究科 農林学専攻 1994年単位取得退学。博士(農学)・筑波大学・1995年3月  
2015年 鹿児島大学、農水産獣医学域農学系、教授  
■所属学会:日本熱帯農業学会、日本作物学会、日本沙漠学会  
■専門分野:比較環境農学  
■研究テーマ:植物、作物栽培による地球温暖化、沙漠化の防止および環境修復

分を多く含むトウゴマ、ナンヨウアブラギリは、化石燃料に代わる次世代の燃料を供給する作物として、実用化へ向けた取り組みが世界各国で進められている。「遺伝子組み換えがもてはやされていますが、世界には多様な特性をもつ植物がまだまだたくさんあります。それぞれの特性をうまく生かす方が、人にも環境にもやさしいのではないのでしょうか」。20%の塩分の中で生きる植物、靴底が溶けるほどの強アルカリ性土壌で育つ植物など、世界の個性的な植物を探り続けてきた研究者の率直な思いだ。「この環境にはこの植物が合います」と適材適所の植物を探り、準備するのが私たち農学者の務めだと思っています。人間の都合に合わせて遺伝子を操作するのではなく、自然界に存在する植物の特性を活用するという考え方は、教育者としても志水先生が大切にしている姿勢。「いろいろな人間がその個性を生かして存在できる社会は

柔軟で、社会として強いのではないかと思います」

### 植物の力で地域おこし

「生で食べられますよ」。圃場を歩きながら、ツル状に伸びた植物の葉っぱを先生は差し出した。噛むと粘り気を帯び、ツルムラサキやモロヘイヤのような食感だ。「オカワカメ」といいます。一番おいしいのは、サツと湯がいてわさび醤油で、という食べ方です」。南さつま市坊津町の農家から栽培法の調査を依頼され、研究と同時に商品化への取り組みを進めている。「坊津は過疎化、高齢化が進んでいます。手軽に作ることでできる特産品を生み出すことができれば地域の活性化につながりますよね」。市場へデビューする日もそう遠くない。「葉を取っても翌日には生えてくる生命力があり、味もおいしい。これはヒットしますよ」。人の幸せを願って二つ一つの事に丁寧に取り組む先生の深い人間愛が、その笑顔にあふれていた。



## 研究室から



SCHOLAR  
INTERVIEW

### 離島の漁業を支える鹿大発の高鮮度冷凍技術

～与論島の魚が全国各地へ！今秋、本格デビュー～

木村先生率いる本学の水産学部チームは、離島の水産業振興に寄与することを目指し数年前から与論町漁協と連携し、水産物の高品質冷凍に関する技術開発を行ってきた。その中で、エネルギー物質として知られるATPが残存する魚を急速冷凍することで、とれたての鮮度が保持されることを発見。高鮮度の水産物を離島から遠隔地へ輸送することが可能になった。与論島で水揚げ、加工された魚が、この秋、大消費地へのデビューを果たした。

このおいしさは売れる！

木村先生は2010年、本学主催の「与論島の水産を元

気にする会」の講師として与論島を初めて訪問。懇親会で口にしたキハダマグロ(シビ)が「めちゃくちゃ美味しかった」。けれども翌日には食味も色も悪くなってしまうことを知り、黒糖焼酎を酌み交わしながら「高鮮度状態で冷凍すると数カ月後でも高品質の刺身として食べることができると漁師さんに力説した。

与論島に限らず離島の漁業にはハンデがつきものだ。消費地に遠いため鮮度による品質優位性を築くことは難しい。また、季節により漁獲が集中すると魚価が低迷し、市場への上市が規制される場合もある。さらに、気象条件に左右されることから漁獲の安定供給は難しく、観光客に地魚を提供できないという実態もある。

これらの課題を解決し、漁獲量を伸ばし、適正な魚価で販売したいというのは漁業者の切なる願いでもある。木村先

生の提言をきっかけに、木村先生を中心とする水産学部チームと与論町の行政、漁協、漁業者との共同研究が始まった。

船酔いしながら通った4年間

与論島の漁業は、基本的にパヤオ(人工漁礁)周囲での二本釣り。漁獲される魚はキハダマグロ、シイラ、カツオなど数kgから数十kgという大型の魚で、二尾釣り上げること「活けしめ」を行う。その後、海水氷溶液中で冷却しながら港に持ち帰り、翌日の朝市で売り、鹿児島や沖縄など消費地へ流通する、というのがこれまでの流れだった。一般的な魚の流通で使われる冷凍設備の温度帯はマイナス20℃からマイナス25℃。「冷凍すれば品質は保持されると思われがちですが、マイナス20℃くらいの温度帯では品質を維持するのは難しいです」ところが、魚に、エネルギー物質であるATPが残存している場合、たんぱく質の変性や変色を抑制できるということを木村先生の研究室では突き止めた。



冷凍解凍刺身(上:カマスサワラ、下:シビ)



洋上での試験風景



ATP魚図の商標登録証



## Scholar Interview

# 木村 郁夫 教授

農水産獣医学域水産学系  
水産学部水産学科  
かごしまCOCセンター長 学長補佐(COC担当)



- Profile** 木村 郁夫(きむら・いくお)  
北海道大学大学院水産学研究科博士後期課程2年中退(1980年3月)。水産学博士・北海道大学1981年9月
- 所属学会:日本水産学会、日本食品科学工学会
  - 専門分野:食品生化学に関する分野、水産食品加工学
  - 研究テーマ:-水産物の高品質維持技術研究

### 流通ルート開拓とブランド戦略

「基礎研究と生産システムづくり、品質管理は、本来私たちの仕事です。でも最終的に流通に乗せないと研究の意味がありません」。漁協の人たちから売り方について相談された木村先生は、かつて大手水産会社に勤務していた経験を生かし、ブランド戦略と販売ルート開拓まで携わった。ブランド戦

略の「環」として「ATP魚®」の商標登録を行った。「魚」の文字の部分には「カンパチ」「サワラ」「シビ」など、冷凍保存する魚種を当てる。「活けしめ」、「高濃度ATP含有」、「急速冷凍」、「緩慢解凍」など、解凍後の高品質を保つというコンセプトを理解し、実践するところへ、商標の使用を認証する方針だ。「このような商品を生産する活動が与論島だけではなく、他の島々にも広がっていくことを期待しています」。与論島発の「ATP魚®」は、鹿児島市の業務用食品卸会社との取引が決定。この卸会社を通じ、県内外の消費地への出荷が始まった。

「漁業は大変な仕事です。とりわけ厳しい環境に置かれているのが離島の漁業者です。従事する人たちがきちんと報われるシステムを作りたい」と願ってここまできました。「ATP魚®」が広く認知されて他の地域のモデルになってくれたら嬉しいですね。「カミアカ」という与論名をもらったという先生は温かな眼差しで語った。



## 総合動物実験施設が「AAALAC」(国際実験動物ケア評価認証協会)の認証を取得

5月21～22日に行われた米国AAALAC International(国際実験動物ケア評価認証協会)の認証評議会において、鹿児島大学共同獣医学部の総合動物実験施設の認証取得が決定されました。

同協会は、動物実験における人道的な使用と管理を促進する非営利組織であり、今回の認証により、総合動物実験施設の動物管理が国際的な水準であることを証明することができました。

共同獣医学部では、今回の認証を受け、動物実験における品質管理を更に向上するとともに、引き続き、平成32年度のEAEVE(欧州獣医学教育機関協会)の認証を目指して獣医学教育の改善を進めていく予定です。

## 高病原性鳥インフルエンザ発生防止の取り組みに対し鹿児島県から感謝状授与

平成28年11月以降に鹿児島県出水市で発生した高病原性鳥インフルエンザに関し、「消毒の徹底」「ツル等、野鳥の監視や死亡野鳥の早期回収」「迅速な検査の実施」など、徹底した防疫対策により、今回初確認から早期の段階での養鶏農場への進入阻止が実現できたことに対し、その取り組みが評価され、5月31日に鹿児島県から鹿児島大学共同獣医学部をはじめとした関係団体へ感謝状の贈呈が行われました。



## 平成29年度種村完司私費外国人留学生奨学金授与式を開催

平成29年度種村完司私費外国人留学生奨学金授与式が7月24日に開催され、前田芳實学長から3名の私費外国人留学生に奨学金が手渡されました。

本奨学金は、種村完司鹿児島大学名誉教授(元本学教育・学生担当理事)が、理事在任時に私費外国人留学生が経済的に厳しい状況であることを目の当たりにし、少しでも金銭面で支援し勉学に専念できるようにと寄附をくださり設立されたもので、今年も5名の留学生に支給されます。

授賞式では、前田学長挨拶に続き、種村名誉教授から挨拶があり、「今回の留学を契機にして、ぜひ日本語を習得して多くの仲間と親睦を深め日中友好の架け橋となってください。これからも有意義な大学生活を過ごしていただきたい。みなさんの今後の健闘を期待します」と激励の言葉がありました。

留学生を代表して、人文社会科学部研究科の金 香蘭(キム ヒヤラン)さんが奨学金への感謝とともに「奨学金を受けたことで経済面だけでなく精神面でも温かい支援を強く感じました。もっと多くの時間を学習や研究、異文化理解のための活動への参加に割り当て、今後、社会へ還元できるよう頑張っていきたいと思います」と抱負を述べました。

## 林野庁九州森林管理局との連携と協力に関する協定を締結

鹿児島大学は、林野庁九州森林管理局との間で「連携と協力に関する協定」を締結することに合意し、8月30日、鹿児島大学において協定締結の調印式を執り行いました。

調印式では、原田隆行局長が、「今回の連携で、林業が抱える問題の解決に向けて、社会人教育や職員のレベルアップ、低コストでの森林育成など、課題解決の糸口になることを期待している」と述べました。

また、前田芳實学長は、「協定締結を機に、さらに九州森林管理局との連携を深め、林業生産専門技術者の養成や、より広域な地域で教育・研究ができるよう発展させたい」と抱負を述べました。

九州森林管理局とは「九州の林業再生のために必要な人材育成等に関する協定書」を平成21年10月に締結していますが、本協定はこれまでの連携事項に研究・技術開発を加え、従前の協定を継続、発展させた内容となります。

今後、本学と九州森林管理局が連携協力して、それぞれの資源、人材、技術や機能の活用を図りながら、生物多様性の保全をはじめとする森林の多面的機能の持続的発揮、林業の成長産業化の実現及び農山村地域の振興に貢献できるよう調査・研究及び人材育成等の促進を図ることとしています。







## 医用ミニブタ・先端医療開発研究センターに 寄附講座「高生体適合性医療機器・臓器開発講座」を設置

研究推進機構医用ミニブタ・先端医療開発研究センターでは、社会医療法人白光会白石病院、日本ゴア株式会社、ニプロ株式会社、株式会社カナメディックス、株式会社ジェイ・エム・エス、有限会社中央医科器械からの寄附により、寄附講座「高生体適合性医療機器・臓器開発講座」を設置しました。

本寄附講座は、現在、鹿児島大学に置かれる7件の寄附講座の一つとなります。設置期間は、平成29年6月1日から平成34年3月31日までの5年間で、総額1億円の寄附金を受け入れます。7月24日には寄附講座が設置される本学稲盛アカデミーにおいて、関係者臨席のもと武隈晃稲盛アカデミー長の祝辞に始まる内覧会を開催いたしました。

本寄附講座では、慢性腎臓病に対する安全かつ高品質な治療法の開発と臨床化を主な目的とし、血液透析医療に適した高い生体適合性を有する医療機器や、生体代用臓器の開発、あるいは既存の医療機器を用いた治療に付随するさまざまな問題に対する新規治療法の開発を目指した臨床研究および前臨床研究を行います。血液透析臨床医療における問題点把握と既存医療機器の課題把握、および既存の医療機器の課題を克服するための新たな医療機器開発や既存医療機器の課題の克服戦略を前臨床研究により確立し、産学協力型の前臨床研究体制の確立と臨床医療での実践を目指します。



## ベトナム及び中国の学術交流協定校等を訪問

前田芳實学長をはじめとした鹿児島大学関係者は、9月4日～7日、ベトナム社会主義共和国ならびに中華人民共和国を訪れ、本学学術交流協定校のNguyen Quang Thuanベトナム社会科学院長、Pham Van Cuongベトナム国家農業大学副学長、Wu Bozhi雲南農業大学書記長とNguyen Hoang Oanhベトナム日本大学副学長、Huang Bizhi雲南省草地動物科学研究院長を表敬訪問しました。

今回の訪問は、雲南農業大学をはじめ、ベトナム社会科学院及びベトナム国家農業大学との一層の連携及び協力関係の構築と本学の稲盛アカデミーベトナム事務所の視察が主な目的でしたが、新たにベトナム日本大学や雲南省草地動物科学研究院も訪問しました。

各訪問先では、施設見学のほか本学との交流を推進している教員や本学の卒業生と意見交換を行い、各大学の特色や本学へのニーズを確認するなど、今後の具体的な学術交流活動の可能性について話し合いました。更に、各学長等との懇談では、双方の強みと特色を活かした共同研究、交流事業を推進していくことでそれぞれ合意し、良好な協力関係を継続、強化することを確認しました。

特に、雲南農業大学は、平成元年5月に学術交流協定を締結してから現在まで28年間に及ぶ共同研究・学生交流を継続し、本学の修了生もスタッフとして多く働いていることから、今回の前田学長の訪問を契機に、さらに活発な相互交流が期待されるところです。



## 「鹿児島の黒食材を食べて健康になる『黒膳』～黒膳研究会@鹿児島大学～」を開催

9月6日「クロの日」、鹿児島大学郡元キャンパスにおいて鹿児島大学市民講座「鹿児島の黒食材を食べて健康になる『黒膳』～黒膳研究会@鹿児島大学～」が開催されました。これは鹿児島の機能性食材を生かした「黒膳」にまつわる講演会や、「薩摩黒膳弁当」と「ねじめびわ茶」を賞味するイベントで、「黒」を特徴とする鹿児島の食材の魅力を紹介したものです。当日は約180名の市民らが参加しました。

第1部の市民講座では、高松英夫理事・副学長(研究担当)の開会挨拶に続き、鹿児島の食材の機能性を研究する研究プロジェクト「黒膳研究会」から、侯徳興農学部教授が「鹿児島の機能性食材を生かす黒膳の研究開発」、乾明夫医歯学総合研究科教授が「医食同源 ～若返りの方策医学的応用の研究と可能性」、改元香鹿児島女子短期大学講師が「黒食材を日々の食事に取り入れる方法」を発表しました。

第2部交流会では、学習交流プラザに会場を移し、伊牟田均監事の挨拶に続き、鹿児島の黒食材をふんだんに使った鹿児島大学監修の「薩摩黒膳弁当」と「ねじめびわ茶」を楽しみました。

また、交流会では、協賛企業の商品紹介ブースや試食コーナーが設けられ、参加者は、出展された各ブースの商品説明を聞き、試食をするなどして楽しんでいました。

最後に近藤英二副学長(社会貢献推進担当)が講演者と参加者への感謝を述べ、閉会となりました。

## 下川特任教授が平成29年防災功労者内閣総理大臣表彰を受賞

平成29年防災功労者内閣総理大臣表彰を地域防災教育研究センターの下川悦郎特任教授が受賞し、前田芳實学長に受賞報告を行いました。

今回の受賞は、砂防行政に有用な提言を行うなど土砂災害防止活動に顕著な功績があったとして表彰されたものです。

表彰式は、9月8日に総理大臣官邸で行われ、下川特任教授は代表として安倍晋三首相から表彰状を受け取り「多発化、激甚化する自然災害に対し、受賞者一同がさらなる研鑽を積み、連携を図って防災、減災に尽力します」と謝辞を述べられました。

また、9月14日の学長報告では、鹿児島での防災研究、火山や地震の状況などさまざまな話題が交わされ、前田学長から「今回の受賞は、これまでの研究成果によるものだと思います。九州では、土砂災害や錦江湾での地震などの災害が起っています。防災研究や学生に対する教育などこれからも力を発揮していただきたい」と祝辞が述べられました。



## コミュニティサイクル「かごりん」鹿児島大学ポートオープニングセレモニーを開催

10月4日、郡元キャンパスにおいて、コミュニティサイクル「かごりん」鹿児島大学ポートオープニングセレモニーを開催しました。

今回の「かごりん」鹿児島大学ポート設置は、鹿児島大学の方針である①CO2削減に資する公共交通の利用推進、②キャンパス間移動の利便性、③地域貢献と、鹿児島市の方針である①CO2等の削減、②回遊性・利便性の向上、が一致したことに加え、本学における「かごりん」に関するニーズ調査の結果、郡元キャンパスと下荒田キャンパスにポート設置の要望が多かったことに基づくものです。

オープニングセレモニーでは、前田芳實学長から、「鹿児島大学に2カ所のポートが設置されたことで、本学学生・教職員ばかりでなく、地域住民をはじめ、より多くの方々にご利用いただけると確信しております。鹿児島大学は、これまで以上に、鹿児島市とともに課題等に取り組み、地域の活性化に少しでもお役に立てればと考えております」と挨拶がありました。

また、森博幸鹿児島市長から、「今回のポートの設置は、鹿児島市と鹿児島大学の連携による事業の一環として実現しました。鹿児島市が目指す環境にやさしいまちづくりの大きな力になると確信しています」と挨拶がありました。

オープニングセレモニーの後、前田学長による「かごりん」の貸し出し操作のデモンストレーションが行われました。



## 鹿大「進取の精神」支援基金へのご寄附のお願い

鹿児島大学は、地域活性化の中核的拠点として、学生のグローバル教育の推進や地域に貢献する人材の育成など教育研究支援の強化に取り組むため、鹿大「進取の精神」支援基金を創設し、寄附のご協力をお願いしております。

つきましては、本基金の趣旨にご賛同いただき、皆様のご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

なお、本学への寄附につきましては、所得税法、法人税法上の優遇措置の対象となります。

お問い合わせ先

鹿児島大学学長戦略室 TEL:099-285-3101, 3102 FAX:099-285-7034

E-mail: s-kikin@kuas.kagoshima-u.ac.jp

基金ホームページ: <https://www.kagoshima-u.ac.jp/kifukin/>





# 進め！ 鹿大生！ STUDENT INTERVIEW

第4回 日中韓3カ国交流陸上競技大会  
(2017年7月2日 中国寧波市にて開催) 日本代表選手

たさか ゆうき  
**田坂裕輝さん**

(教育学部 学校教育教員養成課程 保健体育専修 2年生)



## 「乾坤一擲の跳躍」で国際舞台へ駆け上がる！ ～鹿大グラウンドから東京五輪へ ホップ・ステップ・ジャンプ！～

田坂裕輝さんは今年7月、中国で開催された「第4回日中韓3カ国交流陸上競技大会」に三段跳の日本代表として出場。自己ベスト記録を更新するとともに、並み居る強豪選手の中で4位という好成績を挙げました。勝因は「乾坤一擲の跳躍」と田坂さん。トッパースリートのせめぎ合う大舞台では、技術面だけではなく、のるかそるかのかの気合が運を引き寄せるのだそうです。

「国際大会出場は想定外の出来事」と笑う田坂さんですが、レベルの高い選手のパフォーマンスを間近に見ることができ、ナショナルチームの指導者の的確な助言を得るなど「多くの知見を得た」そうです。次なる目標は2020年開催の東京オリンピック、そして鹿児島国体への出場。「ここまで来られたのは先輩や恩師、指導者の皆さまのお陰。これからも精進し、鹿児島大学の名を全国、世界へ知らしめたいと思います」。グラウンドに爽やかな風が吹きました。

※乾坤一擲(けんこんいつてき)…運を天に任せいちかばちかの大勝負をすること。

### 座右の銘

#### 「乾坤一擲」

ここ一番の大勝負に臨む時、伸るか反るかの大勝負に挑む気合いが実力以上の力を招くということをこれまでの競技生活で感じています。天を味方につけるためにも、普段のたゆまぬ鍛錬と精進、そして感謝の気持ちは不可欠だと思っています。そんな気持ちで、これからも一歩一歩進んでいきたいと私は思っています。



# さっつんが行く!

鹿大キャンパス漫遊記

SATTUN's Campus Sketches



鹿児島大学公式マスコットキャラクター

さっつん



Vol.08

## 就職支援センター

4人の専任スタッフと就職相談員を配置し、学部、研究科を問わず在学中はもちろん、卒業後も進路選択をサポートしています。全国から寄せられる年間3000余件の求人票の提供のほか就職ガイダンスや企業説明会等の開催、各種就職情報提供など、さまざまな側面から支援を行っています。

県外での就職活動の拠点として東京、大阪、福岡にサテライトを開設。パソコンを活用した情報収集のほか休憩、着替えなど予約不要で利用することができます。また、本学では鹿児島大学海音寺潮五郎記念東京学生宿泊施設(世田谷区)を整備。学生及び教職員等の東京近辺における教育・研究の拠点となっており、就職活動、インターンシップの際の利用も可能です。

開室：月～金曜 午前8:30～午後5:15



## 📷 今号の表紙「北辰通り」

農学部エリアから教育学部エリアまで繋がる郡元キャンパスのメインストリートです。約250mにわたって植樹されているワシントンヤシの葉の緑と青々とした空の色が、絶妙なコントラストを醸し出し、南国鹿児島らしさを演出しています。

通りの名称は、大正4年に作られた第七高等学校第14回記念祭歌「北辰斜に」に由来。市民に親しまれる大学を目指して2005年に名称を一般公募し、命名された14の通りの一つです。

毎日多くの学生、教職員が行き交う北辰通りは、さまざまな知と知が接する鹿児島大学で最もホットなスポットであるとともに、今日もまた「進取の気風」を学生ひとりひとりに届けています。

